

祖堂集卷第五

石頭下卷第二曹溪三四五代法孫

大顛和尚、石頭に嗣ぐ、潮州に在り。元和十三年戊戌の歲、真身を迎う。元和皇帝は安遠門に於いて、躬自ら香を焚き、迎候して頂礼せり。皇帝及び百寮俱に五色の光の現わるるを見たり。皆云く、是れは仏光なり、と。百寮は聖感を拝賀せるも、唯だ侍郎韓愈（原作庚）一人のみ有りて独り言く、是れ仏光ならず、と。肯えて聖徳を拝賀せず。帝問う、既に是れ仏光ならず、当に是（原作此）れ何光なるべしや。侍郎は当時失対し、潮州に貶せらるることを被れり。

侍郎便ち朝州に到り、左右に問う、此間すかんに何の道德高行の禅流有りや。左右對えて曰く、大顛和尚有り。侍郎は使をして彼に往きて三請せしむるも皆な赴かず。後に和尚方に仏光の故を聞き、乃ち自ら来たれり。侍郎は相見することを許さず。人をして問わしむらく、三請するも赴かざるに、如今什摩と為てか屈せざるに自ら来たれりや。師云く、三請するも赴かざるは侍郎の為なり。屈せずして自ら来たるは只だ仏光の為なり。侍郎聞き已つて喜悅して則ち前旨を申ぶ。弟子其の時云く、是れ仏光ならず、と。当に道理なるべしや。師答えて曰く、然り。侍郎云く、既に是れ仏光ならず、当に是（原作時）れ何光なるべしや。師云く、当に是れ天竜八部釈梵助化の光なるべし。侍郎云く、其の時の京城に若し一人の師に似たる者有らば、弟子は今日終に此に来たらざりしならん。侍郎又た問うて曰く、未審いぶかし佛に還た光有りや。師曰く、有り。進んで曰く、如何なるか是れ仏光。師喚んで云く、侍郎。侍郎応諾す。師曰く、看よ。還た見しや。侍郎曰く、弟子は這裏に到りては却つて会せず。師云く、這裏若し会得すれば是れ眞の仏光なり。故に佛道は一道にして青黄赤白の色には非ず。須弥盧圍を透過し、山河大地を遍照し、眼見に非ず、耳聞に非ず、故に五目は其の容を覩ず、二聽は其の響を聞かず。若し這個の仏光を識得せば、一切の聖凡虛幻も能く惑わすこと無からん。

師は帰山せんと欲して一偈を留めて曰く、君に辞す恠しむこと莫れ帰山の早きを、松蘿の月宮に對するを憶うが為なり。台殿は金鑠を將つて閑ざさず、来たる時は自ら白雲の封ずる有らん。

自後、侍郎特に山に到り、複礼して乃ち問う、弟子は軍州事多し。仏法中の省要の処、乞つ師指示せよ。師良久す。侍郎措く罔し。

登時三平の侍者と造りて背後に在り、禅床を敲けり。師乃ち廻視して云く、作摩、対えて曰く、先原作光ず定を以て動かし、然る後に智もて抜く。侍郎は三平に向つて云く、和尚は格調高峻にして、弟子は措く罔し。今原作令侍者邊に於いて却つて入処有り。三平に礼謝して州に却歸せり。

・罔措 なにがなんだか解らない。

・登時 当時に同じ。その時。

・先以定動然後智抜 南本涅槃經二十九師子吼品に、善男子、如拔堅木、先以手動、後則易出、菩薩定慧亦復如是。先以定動、後以智抜大十二一七九三〇。

・造侍者 造は漢文としては正しくないが、祖堂集では或る人格となる場合にこの字を用いるようである。

後一日、山に上りて師に礼す。師睡る次いで、来たるを見て起たず。便ち問う、遊山し来たるや、老僧の為に礼拝し来たるや。対えて曰く、和尚に礼拝し来たり。師問う、礼せずして更に何時をか待つ。侍郎便ち礼拝す。

後一日又た山に上る。師問う、遊山し来たるや、老僧の為に礼拝し来たるや。侍郎曰く、遊山し来たり。師曰く、還た遊山の杖を將ち得來たるや。対えて曰く、將ち得來たらさず。師曰く、若し將ち得來たらざれば、空しく来たりて何をか益せん。

又一日、師曰く、老僧は往年、石頭に見えたり。石頭問う、阿那个か是れ汝が心。対えて曰く、即ち和尚に祇対して言語する者はれなり。石頭便ち之を喝す。旬日を経て却つて和尚に問う、前日既原作豈是れ心原無心字ならず。此れを除くの外、何者か是れ心なる。石頭云く、揚眉動目一切の事を除却するの外に、直に心を將ち来たれ。対えて曰く、心の將ち来たる可き無し。石頭曰く、先來は心有り、何ぞ心無しと言つを得ん。心有り心無し尽く同じく我を護る。此の時に於いて言下に此の境を大悟せり。

却つて問う、既に某甲をして揚眉動目一切の事を外に除却せしめたり、和尚も亦た須らく之を除くべし。石頭云く、我は除き竟れ

り。对えて曰く、将ちて和尚に示し了れり。石頭云く、汝は既に将ちて示せり。我が心は如何ん。对えて曰く、和尚に異ならず。石頭曰く、汝が事に関せず。对えて曰く、本より無物なり。石頭曰く、汝も亦た無物なり。对えて曰く、無物は則ち真物なり。石頭云く、真物は不可得なり。汝が心の見量の意旨は此くの如し、也た須らく護持すべし。

・老僧往年見石頭　この話は宗鏡録九八に引用されている。

・言語者是　即心言語馬祖の立場(を)石頭は否定する。

・無物則真物　則には時間的、論理的な経過が入るから、正しくは即でなければならぬ。しかし語録に於いて両者は混同される。

・意旨　要点、不可得といふこと。

僧問う、其中の人相見する時如何ん。早すに其中ならず。進んで曰く、其中の者如何ん。師曰く、渠は這个の問いを作なさず。

・其中　そここのところ。場所をいつ。その中ではない。禅家ではこの語をもつて究極のもの、本来的なものを意味させることが多い。

長髯和尚、石頭に嗣ぐ、潭州攸県に在り。未だ行録を覩みざれば、化縁の終始を決せず。

師は初め石頭を礼し、密に玄旨を領せり。次いで曹溪に往きて塔を礼して石頭に却き廻うす。石頭問う、何処より来たるや。对えて曰く、嶺南より来たり。石頭云く、大瘦嶺頭の一鋪の功德、還た成就せしや。对えて曰く、諸事已に備わるも只だ点眼するを欠く。石頭曰く、点眼せんと要すること莫なきや。对えて曰く、便ち点眼せんことを請う。石頭は脚を躡つ起して之に示す。師便ち連礼し、十数拜して止めず。石頭云く、この漢、什摩の道理を見て但だ礼拜することを知るのみなるや。師又た止めず。石頭進前して把住して云く、你は何の道理を見て、但だ礼拜することを知るのみなるや。師曰く、烘(原作炉)爐上(爐上)の一点の雪の如し。石頭云く、如是、如是。

・但知礼拜　知は英語の know to 〳〵に当たる。そうすることが正しいと思つてする。

・童爐上一点雪　紅焰を上げる炉のほとりの一点の雪、なんの痕跡も残さないもの喩え。

師は十歳の児子を得て、養いて八年を得たり。有る一日、兒子、和尚に啓して曰く、某甲は受戒し去らんと欲得す。還た得たりや。師云く、受戒して什摩をか図る。兒子曰く、某甲祖公の南嶽に在り、那裏に去きて礼觀せんと欲得す。只だ是れ未だ受戒せざれば、敢えて去かず。師曰く、受戒は須らく是れ二十にして始めて得べし。且らく住めよ。

師は忽然として覺察し、喚び来たりて伊に受戒することを許せり。小師明朝に和尚を辞す。和尚云く、子は歸り来たるとき、須らく石頭の処に到り来たるべし。小師応諾す。便ち南嶽に去き、般若寺に受戒し、後却つて石頭に去きて參せり。石頭云く、什摩処よりせるや。對えて云く、長髭より来たり。石頭云く、今夜は此に在りて宿れ、還た得たりや。對えて云く、一切に和尚の処分を取らん。小師は第二日早朝に來たりて不審す。師は便ち新戒を領して山に入れり。路邊に一個の樹子有り。石頭云く、汝は我が与に斫却せよ、這個の樹は我が路を碍ぐ。對えて曰く、某甲は刀子を將ち來たらす。石頭曰く、我が這裏に刀子有り。曰く、便ち請つ。石頭便ち刀を抜き、柄を把つて刀子を過与す。曰く、何ぞ那頭を過し來たらざる。師曰く、那頭を用いて什摩を作す。新戒便ち大悟す。

石頭は新戒をして學業処に歸らしむ。新戒便ち石頭を辞し、師の処に却歸せり。師問つ、你をして石頭に到らしむ、你是還た到れりや。對えて曰く、到ることは則ち到るも通祇せず。師問つて曰く、什摩人に依りて受戒せるや。對えて曰く、他に依らず。師曰く、你是彼中に在りて即ち此くの如し。我が這裏は作麼生。對えて曰く、要且つ違背せず。師曰く、大いに与摩に多知生。對えて曰く、舌頭曾つて染著せず。師便ち咄すらく、這の多口の新戒、出で去れ。此は是れ石室和尚なり。

・只是　しかし。

・忽然覺察　ハタと気付いて。

・把柄過与刀子　柄を相手に向けて刀子を手渡そつとした。伝灯録十四では切先を相手に向けている。

・那頭　そちら。

・通風耗（あいさつ）名のり出る。

・要且 まあ、つまりは。

・大与摩多知生 与摩太多知生が正しい言い方。

・舌頭不曾染著在 私の舌は真つ白、本来のまま。在は句末にあつて強い断定の語気を表わす。

竜潭和尚、天皇に嗣ぐ、豊朗州に在り。未だ氏を詳らかにせず。在俗の時、世業として餅師と作り、天皇の巷陽に住在せり。其の
天皇和尚は寺内に住して小院に独居し、多く禅房を閉ざして静坐するのみ。四海の禅流は湊泊するに由し無し。唯だ餅師有りて、食
時に至る毎に躬から餠餅十枚を持って以て斎食に餉するのみ。是くの如くして替らざるもの数年なりき。天皇は食し已る毎に常に一
餅を留め、之を与えて云く、吾れ汝に恵原作慧みみ、以て子孫を蔭うぶす、と。日日斯くの如くし、以て常准と為せり。

師因みに一日に於いて、忽ち自ら之を訝り乃ち問う、此の餅は是れ某甲持ち來たる、何ぞ乃ち某甲に恵む。天皇云く、是れ汝持し
來たる、汝に復すに何ぞ咎めん。師は此の語を聞きて、少しく驚覺するに似て、乃ち問うて曰く、弟子は浮生擾擾たり、畢竟如何ん。
天皇云く、在家は牢獄にして逼進し、出家は逍遙として寛広なり。師便ち天皇に投じて出家せり。天皇云く、汝は昔し福善を崇くし、
今、吾が語を信ぜり。宜しく崇信と名づくべし。

・巷陽 境内の南

・湊泊 接近する。

・餉 ひるめし。

・在家牢獄 四十二章經 人繫於妻子舍宅、甚於牢獄」。

具戒を受け已つて、執爨するもの数年。忽ち一日に於いて天皇に問うて曰く、某甲は身は僧倫に廁り、已に宿志を果たせるも、未

だ和尚の今の必要を指示することを蒙らず。伏して乞う、指示せよ。天皇曰く、餘の吾が身辺に到りてより、未だ嘗つて汝に必要を指さずんばあらず。師問う、何処か是れ和尚の某甲に必要を指す処なる。天皇曰く、汝は茶を撃げ、吾は汝が為に喫す。汝は食を持ち、吾は汝が為に受く。汝は和南し、吾は汝が為に低首す。何処か是れ汝に必要を示すならざる。

師は低頭して沈吟するもの頃刻。天皇云く、見るときは即ち直下に便ち見る。擬思すれば則便ち差う。師は聞き已つて指要を頓悟せり。便ち問う、畢竟如何んが保任すれば則ち始終に患無きことを得ん。皇曰く、性に任せて逍遙し、縁に随つて放曠す。安禅習定を要せず、性は本より拘する無し。耳を塞ぎ睛を蔵すを要せず、靈光迥かに耀く。愚なるが如く訥なるが若く、行は時を驚かさず。但だ凡心を尽くして、別に聖解無し。汝能く忝らば当た何をば患えんや。

師は既に宗要を領して觸目朗然たり。猶お遠客の家に還りて他遊の意を息めしが如く、亦た貧の宝蔵を収めて故より足らざる無きが如し。荊渚より澧陽の龍潭に至りて棲止す。行は俗を驚かさず、世は能く疑う莫し。未だ嘗つて輒ち機鋒を銜わざれば、玄流は扣撃するに由無し。居る所の蘭若は小溪潭に臨む。時の元陽に属せば、郡民多く是の処に於いて雨沢を祈求せり。故に龍潭和尚と号す。

・沈吟 考え込む。

・保任 我が任として抱え込み、百パーセント責任をもつ。

・故無不足の下に求の字があるが、しばらく矣に改めて読む。

・元陽 真夏。

僧有り問う、髻中の珠は誰人が得ん。師曰く、賞翫せざる者得ん。僧曰く、何処にか安著せん。師曰く、所在有るを待ちて即ち汝に説似せん。

・不賞翫者得 有難がらない者が得る。

・待 その時になつたら。

・説似 ……について言う。話す。

尼僧問う、如何にして僧と為ることを得去らん。師曰く、汝は尼と作り来たること多少(原作小)時ぞ。尼曰く、還た僧と為る時有るや。師曰く、汝は即今是れ作摩ぞ。尼曰く、現に是れ女身なり、何ぞ識らざるを得ん。師曰く、誰か汝を識らん。

・何得不識 それがどうして分からないの。

・誰識汝 誰も知らない。

翠微和尚、丹霞に嗣ぐ。西京に在り。師諱は無学。信皇帝詔りして入内せしめ、大いに元教を敷かしむ。帝情大いに悦び、紫と法号広照大師を賜えり。自余は未だ行録を覩ざれば、化縁の終始を決せず。

師因みに羅漢を供養する次いで、僧問う、今日、羅漢を設く、羅漢は還た来たるや。師云く、是れ汝は毎日什摩を喰うや。

・設羅漢 羅漢齋をもつける。

・喰 大食すること。

雲岳和尚、葉山に嗣ぐ。潭州澧陵県に在り。師諱は曇晟、姓は王、鍾陵建昌県の人なり。其の生るるや自然に胎裏右袒し、緇服の倣若し。石門に出家す。初め百丈に参じ、入室するもの十数年間。次いで葉山に参ず。葉山問う、汝が師百丈は徒に於いて奚をか示す。師對えて曰く、師は今何物を示せるや。葉山云く、汝に因りて百丈を識り得たり。師は葉山を稟承し、後攸県に止まる。大いに法化を弘む。

師有る時、衆に謂いて曰く、今の人家の兒子有り、問著せられて道い得ざる底有ること無し。洞山問う、他かれが屋裏に多少(原作小)の

典籍有りや。師曰く、一字も也た無し。進んで曰く、争でか与摩に多知生なることを得ん。師曰く、日夜善つて睡らず。洞山云く、問著すれば則ち道い得ざる底有ること無し。一段の事を問わん、還た道い得るや。師曰く、道い得る却つて道い得ず。

・人家児子 洞山を誘い出す工母か。

・無有道不得底 答えられないものはない。

・問一段事 あらたまつた言い方。

・道得却不得 道い得るといつてや一段の事(は)答えられない。

師、僧に問う、什摩^{いすこ}処より来たれるや。对えて曰く、石頭上に語話し来たれり。師曰く、石頭は還た點頭せしや。对えて曰く、師の未だ問わざる時却つて點頭す。

・石頭上 石の上で。

・點頭 うなづく。

師因みに看経する次いで、洞山云く、師に就いて眼睛を乞う。師曰く、汝が底は阿誰に与え去りしや。洞山云く、某甲には無し。師曰く、汝有り。什摩処に向つてか著けん。洞山無对。師曰く、眼睛を乞う底は是れ眼なりや。洞山云く、眼には非ず。師曰く、咄。出で去れ。

・汝底与阿誰去也 お前の目玉は誰にやったのか。

・某甲無 私にはもともと無い。

・乞眼睛底是眼不 目玉が欲しいといったのはお前ではなく眼なのか。

師因みに粽子を行ず。洞山受け了り、又た展手して云く、更に一人有り。師云く、那个の人は還た喫するや。洞山云く、行ずれば即ち喫せん。

・行粽子　ちまきを配る。

・更有一人在　在は句末の強辞。

洞山辞する時、師問う、何処に去くや。洞山云く、和尚を辞すると雖も、未だ止まる所をトせず。師云く、是れ湖南に去くこと莫きや。对えて曰く、無なり。師曰く、是れ帰郷し去ること莫きや。对えて曰く、也た無なり。師は高声を挙げて云く、早晚か却来する。对えて曰く、和尚に住処有るを待ちて即ち来たらん。師曰く、此れより一別して後は応に相見するを得ること難かるべし。对えて曰く、相見せざるを得ること難からん。

・莫是……不……ではあるまいか……なのだろうか。

・早晚　時間について問う俗語の疑問詞。

・待　その時にならたら。

洞山、滄山に到る。滄山は即ち大円にして当時の野匠たり。徒千衆を集め、化を三湘に振えり。乃ち洞山の来たるを見、顧て焉を異とせり。

他日、滄山密かに宴室を離れ、独り林泉を歩めり。洞山乃ち疾追して其の後を躡跡し、仏地の西に至るに作務の所有り。洞山遂に進前し、礼拝して言いて曰く、某甲窃かに聞く、国師に無情説法の示し有りと。曾つて其の語を聞き、常に其の微を究めんとす。毎に心を励まさんと欲し、此れを尽くさんと願つ。滄山欣然として觀て曰く、子は何に於いて此の語を獲しや。洞山具さに始終を述べて拳せり。拳し了るや滄山乃ち曰く、此間にも亦た小許有り、但だ其の人に遇うこと罕なるに縁るのみにして、我の慙しむ所には非

ざるなり。洞山云く、便ち請つ。滄山云く、父母縁生の口は終に敢えて道わず。洞山は礼拝せず。便ち問つ、還た師と同時に道を慕う者有りや。滄山云く、此こより濃陵原側に去くに石室相隣り、雲岳道人なる有り。若し能く草を撥つて風を瞻ば、必ず子の重んずる所と為らん。

・此間 一〇一。

・撥草瞻風 外見にとらわれずに本質そのものを見て取る。

洞山便ち問つ、無情説法は何摩人の聞くことを得る。師曰く、無情説法は無情の聞くことを得。進んで曰く、和尚は還た聞き得るや。師云く、我れ若し聞かば、汝は則ち我を見るを得じ。進んで曰く、与摩ならば則ち某甲は和尚の説法を聞くを得去らざらん。師云く、吾が説法すら尙自^なお聞かず、豈に況んや無情説法に於いておや。此れに因りて、洞山は疑情を息む。

乃ち偈を作りて曰く、可笑奇なり、可笑奇なり、無情の解く説くこと不思議なり。若し耳を將つて聴かば声は現せず、眼処に声を聞きて方めて知るを得。

・可笑 すばらしい楽しい愉快だの意と、嘲笑しておとしめる意とがある。伝灯録は也太奇と改めているが、可笑の意味が正當に理解されなかつた故であらう。

師、尼衆に問うて曰く、姪爺は還た在りや。對えて曰く、在り。師曰く、年は多少ぞ。對えて曰く、年は八十なり。師云く、个の爺有りて年は八十には非ず、汝還た知るや。對えて曰く、是れ与摩に來たる底は是れなること莫きや。師曰く、這个は猶お是れ兒子なり。洞山云く、直饒い來たらざるも也た兒子なり。

・姪爺 お父さん。

・猶是兒子 まだ子供でしかない。

問う、一念瞥起して便ち魔界に落つる時如何ん。師曰く、汝は什摩に因りてか佛界より来たる。却つて云く、還た会するや。対えて曰く、会せずと道う莫れ。設使い会し得るも也た只だ是れ左之右之。

・莫道 ……は言わずもがな。

・左之右之 近似値を探るだけ。

師は道吾、船子と三人、山下の人の請齋を受く。一人云く、齋し去るに日晩し。一人云く、近し那、動歩すれば便ち到らん。師云く、一人有り動歩せずして便ち到るは作麼生。

尋後、洞山拳するを聞きて云く、此の語は最も力を著く。△原作△鑊湯炉炭に入りて、焼煮を被らざるが如くして始めて得ん。這裏は永劫に失わざるを得るも、余処は暫時の間を得るのみ。切に囑す、第一に舌頭上に向いて取弁すること莫かれ。他の了事の言語を記して、什摩の用処か有らん。この功課は無入辺より得て、聰明強記に由らず。閑処に向つて功を置くこと莫かれ。一步廻らざれば、冥然たること累劫ならん。所以に雲岳云く、この相良中に向いて人身を失却する最も苦なり。此の苦より苦しきは無しと。

・最著力 内容が最も充実している。

・功課 修行、勉強

・辺 場所、田地。

・失却人身 せうかく人間に生まれながら畜生になる。

師、僧に問う、何処に去き来たるや。対えて云く、添香し去り来たり。師曰く、還た仏を見しや。対えて曰く、見たり。師曰く、什摩処に見しや。対えて曰く、下界に見たり。師曰く、古仏、古仏。

師が僧に問う、どこに行つていたのだ。答えて言つ、香を供えに行つていました。師が言つ、仏さんを見たか。答えて言つ、見ました。師が言つ、どこで見たか。答えて言つ、下界で見ました。師が言つ、古仏、古仏。

師、茶を煎る次いで、道吾問つ、作摩をか作す。師曰く、茶を煎る。吾曰く、阿誰に与えて喫せしむるや。師曰く、一人の要る有り。道吾云く、何ぞ伊をして自ら煎しめざる。師云く、幸いに専甲の在る有り。

師が茶をいれていた時、道吾が問う、なにをしているのだ。師が言つ、茶をいれている。道吾が言つ、誰れに飲ませるのだ。師が言つ、一人もとめているのが居る。道吾が言つ、それに自分でいれさせたらいいじゃないか。師が言つ、せつかくわしが居るんだから。

・専甲 某甲に同じ。

葉山問う、承り聞くに汝は解く師子を弄すと。幾出を弄し得るや。師曰く、六出を弄し得。葉山云く、我も亦た弄し得。師問う、和尚は幾出を弄し得るや。葉山云く、我れは一出を弄し得。師曰く、一即六、六即一。

滄山、師に問う、承り聞くに、長老は葉山に在りて解く師子を弄せりと、是なりや。師曰く、是なり。滄山云く、為復長に弄するや、還た置く時有りや。師曰く、弄せんと要すれば即ち弄し、置かんと要すれば即ち置く。滄山曰く、置く時師子は什麼処に在りや。師云く、置けり、置けり。

・出 芝居や音曲の一ふし。芸能用語。

・置也 ほら置いてしまった。

師、一老宿の房を窺う。老宿云く、只だ這个是れ、窺いて什麼をか作す。師云く、大いに人有つて与摩に道うを肯わず。

・只這个是 ただこれだけだ。

師、道吾に問う、老兄は家風作麼生。吾曰く、汝をして指点著せしむるも什摩を作すにか堪えん。師云く、這个無くして來たること多少時ぞ。吾云く、牙根猶お生澀を帯ぶ。

・教汝指点著堪作什摩 お前にわしの家風をこつたと云わせるとしても出來、こない。

・生澀 なめらかでない。

問う、如何なるか是れ正修行路。師云く、修は是れ墻塹、不修は是れ裏頭の人。

・墻塹 修善のきくもの。

・不修 道は本来ある。修を要しない。

・裏頭人 なかにある人。

師、衆に問う、世間は什摩物が最も苦しき。云く、地獄是れ最も苦し。師云く、地獄は未だ是れ苦しからず。今時、這个の相良中に人身を失却することを作すこと最も苦し。苦の此の苦より過ぐるは莫し。

師は洞山と薑を鋤く次いで、師は先徳の事を説けり。洞山云く、這个の人は如今什摩処にか在る。師良久して云く、作摩、作摩。洞山云く、太だ遅し。

・太遅也 遅すぎる。

僧有り出で来たりて西三則の語をば師に拳似せり。師復た審して云く、我れ適来只だ汝の声を聞くのみにして、汝が身を見ず。出で来たれ、我れ汝を見んことを要す。其の僧は五指を豎起す。師云く、人を苦殺す。泊んど錯つて者个の漢を放過せんとす。洞山問う、此の僧の五指を豎起せるは意如何ん。師曰く、五分法身を現わす。如今は阿那个分に在りや。

・師復審云 二云字の下に之字あり。

・適来 いましがた。

・苦殺人 ひどい目に会つた。

・顔錯放過者个漢 すんでのところどこいつを見逃してやるところだ。ペテンにかかるところだ。

・如今在阿那个分 この僧はいまどの分にいるのか。

師の遷化に臨みし時、洞山問う、和尚百年の後、人有つて問わん、還た師の真を遡し得たりや、と。他がに向つて作麼生か道わん。師云く、但だ他に向つて道え、只だこの漢是れ、と。洞山沈吟する次いで、師云く、此の一著子は莽鹵に吞不過なれば、千生万劫休す。闍黎警起すれば草深きこと一丈ならん。況んや乃ち言有るをや。師、洞山の沈吟するを見て、衷情を説破せんと欲得ほす。洞山云く、師に啓す、説破するを用いず。但し人身を失わずんば此の事の為に相い著けん。

・百年後 遷化の後。

・只这个漢是 それ以上でもなく、それ以下でもない。ただそれだけ。

・沈吟次 原文は吃沈底。

・此一著子 原文は此著一子。

・莽鹵 がさつ、おおまか。

・吞不過 のみ下せない。

・千生万劫休 永久にお手上げ。

・師見洞山沈吟 原文は吟字の下に底字あり。

・相著 力を尽くす。

師遷化せし後、太相齋を過ぎ、師伯と共に瀉山に往かんと欲して、直に潭州に到りて大溪を過ぎる次いで、師伯は先に過ぎれり。洞山、這岸を離れて未だ彼岸に到らざる時、水に臨みて影を覩、大いに前事を省し、顔色変異し、呵呵底に笑えり。師伯問う、師弟、什摩事か有る。洞山曰く、師伯に啓す、个の先師の従容の力を得たり。師伯云く、若し与摩ならば須らく語有るを得べし。洞山便ち偈を造りて曰く、切に忌む他に随つて覓負むることを、迢迢として我れと疎からん。我れ今独り自ら往き、処処に渠に逢うことを得。渠は今正に是れ我れにして、我れは今是れ渠ならず。心に須らく与摩に会すべし、方めて如如に契つことを得ん。

・得……力 おかげをこつむる。

・従容 みちびき。

後、人有つて洞山に問う、雲岳道く、只だ這个の漢是れ、と。意旨如何ん。洞山云く、某甲当初泊んど錯つて承当せんとせり。報慈拈じて問う、累害は何摩処に在りや。又た前問を續ぐらく、如今作麼生。又た洞山に問う、雲岳道わく、只だ這个の漢是れ、と。還た事有ることを知るや。洞山云く、先師若し有ることを知らざれば、又た争でか解く^うと与摩に道わん。良久して又た曰く、若し事有ることを知らば、争でか肯えて与摩に道わん。

保福拈じて長慶に問う、既に事有ることを知るに、什摩と為てか肯えて与摩に道わざる。慶曰く、此の問いは甚だ当たれり。保福曰く、昔日、雲岳又た奚をか為す。慶云く、子を養^うんで方めて父の慈を知る。

・承当 肯定する、うけがう。

・累書 まきぞえ。

・有事 南泉の、知有底人とかかわりを持つ。

・争解与摩道 あんなことが言えるはずがない。

・争肯与摩道 あんな言い方をするような気になるはずがない。

・昔日雲岳又奚為 焦点を雲岳にもどした。

・甚当 的を射ている。

・養子方知父慈 師の恩は自分が人の師となつて始めて感得できるものだ。雲岳は洞山を得てはじめて雲岳になり得た。父はこゝでは薬山を指す。

師、比色坑裏に甘橋を貯う。洞山来たり、不審して立地^たつ。師曰く、那边に還た這个有りや。洞山曰く、有るも也た這个の無用の処に過ぎたり。師曰く有るも也た未だ嘗つて闍黎に与えず、什摩の有用無用をか説かん。洞山は当時無対。三日を隔てて道わく、和尚の専甲に与えんことを恐怕す。師は之を肯つ。

・比色 不詳。

・坑 焼き物のワシ。

・立地 俗語立つ。坐地すわる(臥地)ふす。地につく動詞は、唐代においてはこの三例のみ。

・也 それどころではない。

師、黄蘗の侍者に問う、汝が和尚は還た説法するや。对えて曰く、也た説く。師云く、汝は還た聴くや。对えて曰く、也た聴く。師云く、説く時は即ち聴く、説かざる時は還た聴くや。对えて曰く、聴く。師曰く、説く時は即ち汝の聴くに従す。説かざる時は什摩

を聴くや。对えて曰く、この人無かる可からざるなり。師曰く、嘿する底是なりや、説く底是なりや。对えて曰く。嘿する底是なり。師曰く、泊んど錯つてこの漢を放過せんとす。

師、衆に示して云く、門より入る者は宝に非ず、直饒い説き得て石の点頭するも、亦た自己の事に干わらず。又た云く、心を擬すれば則ち差つ。況んや乃ち言有るをや。恐らく示す所転た遠きこと有らん。

・擬心則差云 般若無知論の語

僧、石頭に問う、如何なるか是れ祖師意。石頭曰く、老僧面前一踏の草、三十年来曾つて鋤かず。人有り師に拳似す。師云く、牛は欄辺の草を喫せず。

・踏 ある一定の広さ。一塔児。

・牛 石頭を譬える。

・欄 牛の囲い。

南泉云く、智不到の処、説著するを得ず。説著すれば頭角生ず。人有り拳して師に問う、古人与摩に道う、意作麼生。師曰く、兄弟も也た説くこと莫れ。この事を説著すれば説く底の人を損著せん。

人有り拳して洞山に問う、雲岳与摩に道うは作麼生。洞山云く、途に在り。人有り拳して雲居に問う、洞山与摩に道う、意作麼生。居云く、説似せり。人有り拳して疎山に問う、雲居与摩に道う、意作麼生。疎山云く、一棒もて竜蛇を打殺す。

師は地を掃く次いで、寺主を叫ぶ。問う、師は何ぞ自ら駈駈することを得たる。師曰く、一人有りて駈駈せず。寺主曰く、何処に

第二月有りや。師は掃箒を竖起して云く、這個は是れ第幾月か。寺主無對。玄沙代つて云く、此は猶お是れ第二月なり。

・掃箒 ほつき。

洞山問う、無量劫來の余業の未だ尽ぎざる時如何ん。師云く、汝は只今、還た作すや。對えて曰く、更に勝妙なる有るも亦た作さず。師云く、汝還た歡喜するや。對えて云く、歡喜することは即ち敢えてせず。糞掃堆上に一顆の明珠を捨得するが如し。

師、僧に問う、承けたまわるらく、汝は解くトすると、是なりや。對えて曰く、是なり。師云く、試みに老僧をトし看よ。無對。洞山代つて云く、和尚の生月を請う。

師は会昌辛酉の年に忽ち疾を示してより、十月二十七日に至りて遷化せり。無住大師淨勝の塔と勅諡す。

華亭和尚、葉山に嗣ぐ、蘇州に在り。師諱は德誠、未だ姓を詳らかにせず、始終を測る莫し。

師は昔し雲岳、道吾と三人、並びに葉山の秘旨に契えり。葉山の世を去りし後、三人共に議り、少多の種糧と家具を持し、澧源の深邃にして人烟を絶つ処に隱れ、世を避けて道を養い生を過ほすさんと擬す。三人は議り畢りて即ち晨を候ちて去かんとす。三人の中、花亭は長に処り、道吾は末に居る。

中夜に至り、道吾は三衣を具して二師兄に白して曰く、向來議れる所は我が三人に於いては甚だ本志に適えり。然れども石頭の宗枝を埋没すること莫きや。花亭曰く、什摩に因りてか埋没することを得る。道吾云く、兩個の師兄の、某甲と三人、深邃にして人烟を絶つ処に隱れ、世を避けて道を養い生を過ほすは豈に是れ埋没するならずや。師云く、師弟は元來這個の身心有りしか。若し然ら

ば、山に入るを用いず、各自に分れ去らん。此くの如しと然いえど雖も、事有りて師弟に囑す。專甲は分襟の後より蘇州花亭桌に去き、小船子を討めて水面上に遊戯せん。中に於いて若し靈利の者有らば、他かれをして專甲の処に来たらしめよ。道吾云く、師兄の尊旨に依らん。此れより三人各自に分れ去れり。

・於中 弟子の中で。

道吾は出世して数年並びに靈利の者を見ず。一日有りて新到參せり。道吾問う、什摩処より来たる。對えて曰く、天門山より来たれり。吾云く、什摩人が住持する。對えて曰く、某与摩の和尚。道吾云く、什摩の仏法の因縁か有る。其の僧は兩三則の因縁を拳せり。道吾便ち歡喜し、処分して安排せしめたり。

・処分安排 泊まらせてやるように言いつけた。

夜間に院主を喚びて云く、某甲は天門山に去ゆかんと欲得ほつず。輒ちこの消息を出だすを得ず、と。当夜便ち發行し、便ち天門山に到れり。纔かに三門前に和尚の道吾を望見するや、便ち走りて下り来たり、道吾を引接して法堂に上らしめたり。一切しりし後、便ち問う、和尚は什摩事有りて這裏に到れるや。道吾曰く、特に長老の為に來たれり。來日開堂せんとすと説くを見る。還た是なりや。對えて云く、什摩の堂をか開かん。与摩の事無し。道吾曰く、与摩に道うこと莫かれ。來日を待つを用いず、今夜速やかに開堂せよ。主人推し得ずして便ち昇座し、兩三則の言語を破題せり。

・纔 くしたとたん。や否や。

・推不得 ことわり切れなかつた。

・破題 主題を説き起す。

人有りて問う、如何なるか是れ真仏。師曰く、真仏は無相なり。問う、如何なるか是れ法眼。師曰く、法眼は無瑕なり。道吾は此

の対答を聞きて耳を掩えり。京口は堂を下り、遂に道吾下に吾の字重複してありを屈して房に来たらしむ。京口問う、某甲の対答、過の什摩処に在りてか耳を掩つて出で去れる。道吾曰く、師の精彩を觀るに甚だ是れ其の器なり。奈に縁りてか其の人に遇わざる。某甲の師兄、蘇州花亭県に在り、小船子に乗りて江裏に遊戯す。長老纒かに那裏に去くや便ち来由有らん。這裏に若し靈利の者有らば、二人を領し、座主の衣服を著けて去け。

・屈道吾来房 私部屋へおいで下さいと道吾に御願ひした。

主人当夜に便ち発ち、直に江辺に到りて立てり。師纒かに三個の座主を望見するや便ち問う、座主、那个の寺裏に在原作従りて住すや。对えて曰く、寺は即ち住せず。住するは即ち寺ならず。師云く、什摩の爲の故に住せざるや。对えて曰く、目前に寺無し。師曰く、什摩処より学得し来たるや。对えて曰く、耳目の到る所に非ず。師曰く、一句合頭の意、万劫の繫驢橛。便ち打つこと数下せり。師は他を打つと雖も根性の靈利なるを見たり。

・一句合頭意 「非耳目之所到」といつこと。伝灯録では「一句合頭語」となっており、これが後世に通用している。

又た云く、適来祇对せる底の阿師、船に下るを恠しむこと莫れ。天門も便ち船に下りて便ち問う、毎日直鉤もて魚を釣る、此の意は如何ん。云く、垂糸千尺(原作丈)、意は深潭に在り。浮定有無、鉤(原作句)を離れたる三寸もて、師は何ぞ問わざる。天門、和尚に問諮せんと擬欲す。師は船槁もて霧便に撞けり。天門却つて出でて云く、語は玄を帯びて而も路無く、舌頭は談じて而も談せず。師云く、毎日直鉤もて魚を釣り、今日一个を釣り得たり。師下に二字あるも不明、語有りて云く、竿頭の糸線は君の弄ぶに従すも、清波を犯さざるは意自ら殊なる。

・莫恠下船 自分は船に下るがあしからず。

・天門便下船 船は華亭の船。

・直鉤 まつすくな釣り針。

・浮定 不安定なのとぴたりとおさまっているもの。(?)

・無路 言葉としての路をとどめていない。

師、天門に問う、座主還た去き得るや。対えて曰く、去く。師曰く、去くことは即ち去くに一任するも、還た其の事を見るや。対えて曰く、見る。師曰く、作麼生か見る。対えて曰く、草を見る。師は再び囑して曰く、子は身を蔵する処に跡を没し、跡を没する処に身を蔵せよ。両処に住せざる、實に是れ吾が教えなり。

人有りて拈じて花蔽に問う、如何なるか是れ身を蔵する処に跡を没す。花蔽曰く、夾山親しく花亭の囑を受く。如何なるか是れ跡を没する処に身を蔵す。蔽云く、今朝忽ちこの猷郎を覩る。

此れに因りて頌して曰く、身を蔵して跡を没するは師親しく囑し、跡を没して身を蔵するは自ら知る可し。昔日は時時に劍客に逢い、今朝は往往に癡兒に遇う。

・今朝 今の意

・忽覩 パツタリと出会う。

・叔郎 バカ。

擇禪師、道吾の夾山を指して師を尋ねしめしに因りて、頌して曰く、京口と玄を談じて既に名有り、吾山は特地に途程に渉る。法眼に瑕翳無しと云うと雖も、争奈せん其の人の耳を掩うて聴くを。参学は須らく真正の匠に参ずべし、合頭もて虚しく詐るは聆くを勞せず。此来更に師を尋ね去らんと欲せば、決至^{まさ}心当^{まさ}に暫く形を改むべし。道友当年深く契会し、老僧今日苦ろに叮嚀す。特に水雲の知識に報じて道う、半秋の孤月の花亭に落つと。

・特地 わざわざ。

・此来 決至 不詳

・叮嚀 くりかえし言ひ聞かせる。

又た夾山頓遇以華亭頌に曰く、一たび輕舟を泛べてより数十年、隨風逐浪して因縁に任ず。只だ道つ子期の能く律を弁ずるのみと、誰か知らん座主の將に參禅せんとすとは。目前に寺無く椿楸を成ず、句下に相い投ず事は然らず。遙かに指す碧潭に垂釣する叟、師の退けと呵するを被りて頓に筌を忘ぜり。

・頓遇以 不詳

・只道 ただ……だとばかり思っていたらそうではなかった。

裨樹和尚、葉山に嗣ぐ。未だ実録を觀ざれば、化縁の終始を決せず。

因みに道吾臥する次いで、師問う、作摩をか作す。吾云く、蓋覆す。師云く、臥する底是なりや、臥せざる底是なりや。吾云く、兩処に在らず。師云く、蓋覆するを争那何せん。道吾乃ち扠袖して出づ。

福先拈じて僧に問う、蓋覆する意作麼生。僧無對。自ら代つて良久す。

・蓋覆 ふとんをかぶっている。

・扠袖而出 袖を扠つて立つ。相手に対する決絶の意を示す場合が多い。

師、道吾に問う、作摩をか作し來たれる。吾曰く、親近し來たれり。師曰く、你道つ親近し來たれると。更に兩皮を動かすことを用いて作摩をか作す。吾云く、豈に借ること無からんや。師曰く、曾つて人の為にせず、作摩をか借らん。石霜云く、此は是れ他人の口なり。

・兩皮 上くちびると下くちびる。

師の地を掃く次いで、趙州問う、般若は何を以て躰と為すや。師曰く、只だ与摩にし去るのみ。趙州は第二日に師の地を掃くを見

て依然として与摩に問えり。師曰く、この問いを借らん、闍黎は還た得たりや。趙州曰く、便ち請う。師便ち問う、趙州は掌を拍つて去れり。

・拍掌而去 いやお見事な問い方でしたと言つ意を含む。あるいは一本づつたといつところか。

道吾和尚、薬山に嗣ぐ、劉陽県に在り。師諱は円智、姓は王、鍾陵建昌の人なり。涅槃和尚の指示に依りて薬山に参ぜり。

薬山、衆に示して云く、法身、四大を具す、阿誰か道い得る。若し人有りて道い得るならば、汝に一腰褌を与えん。師曰く、性地は風に非ず、風は性地に非ず、是れ風大と名づく。地水火も亦復また是くの如し。薬山は之を肯い、前言に違わず一腰褌を贈れり。

・法身具四大 四大を溶かし込んだ生々しい法身。

・性地非風云 伝灯録十四では南泉の示衆になつてゐるが、そこには性地非空、空非性地、此是地大。三大亦然」とある。

・風大 直前の風とは次元が違つ。法身との対応において引き上げられた四大。

・贈一腰褌 腰褌を人に与えるなど、中国人の感覚からすると余程のこと。尋常のことではない。

石霜問う、百年後、忽もし人有りて極則の事を問わば、作麼生か他に向つて道わん。師、沙弥を喚ぶ。沙弥応諾す。師云く、浄瓶に水を添著せよ。師却つて石霜に問う、適来は何摩をか問ひし。石霜再び拳す。師便ち起ち去る。

・却 あとで。日が経つても良い。

・適来 いましがた。

・著 句末にそえて命令を表わす。

・石霜再拳 自分で、添浄瓶水した。

師下山して五峯に到る。五峯問う、彼中の老宿を識るや。師云く、識らず。峯云く、何が故に識らざるや。師云く、識らず、識らず。

・彼中老宿 「伝灯録では菓山老宿」とする。

僧問う、如何なるか是れ和尚の家風。師便ち禅床を下りて拝する相を作して云く、子の遠来するを謝す、都べて祇対無し。

・作拜相 「伝灯録は、作女人拜」とする。

・謝子遠来云 ようこそ遠方より、とんとおもてなしはございませんが。

・都無 都は否定の意味を強める働きをするのみ。

問う、万里無雲なるも猶お是れ傍来の日、如何なるか是れ本来の日。師曰く、今日は麦を曬すに好し。

・万里無雲 煩惱がふき払われた譬えに用いる。本来清浄の境地、そこに慧日が輝く。

・傍来日 本来の太陽ではない。

・好 ……するのにもつてこいだ。

因みに瀉山、雲岳に問う、菩提は何を以て座と為すや。岳曰く、無座をば座と為す。雲岳却つて瀉山に問う。瀉山云く、諸法空を以て座と為す。瀉山却つて師に問う。師曰く、坐するも也た伊の坐するに聽す。臥するも也た伊の臥するに聽す。一人有りて坐せず臥せず、速やかに道い將ち来たれ。

・坐也聽伊坐 坐したければ坐すがよい、聽は勝手にしろという語気、伊は文脈からは菩提を承ける。

・不坐不臥 速道将来 坐りもしない、寝もしない、さあどつた。坐が行住坐臥の坐に変わっている。座を否定するためにそうした。

師、笠子を將ち出だす。雲岳問う、這个を用いて作摩をか作す。師云く、用処有り。岳云く、黒風猛雨來たる時作麼生。師云く、蓋覆著す。岳云く、他は還た蓋覆を受くるや。師云く、此くの如しと雖然も要且つ漏する無し。

・有用処 笠の用をなす。

・蓋覆著 見事に防ぐ。動詞の後に用いる著は、その動作の完成を示す。うまく……し上げる。

・他還蓋覆也無 あなたはそうだが、彼はどうだ。

・雖然如此、要且無漏 それはそうだろうが、ともかく笠は漏ることがない。

問う、如何なるか是れ今時著力の処。師曰く、千人喚ぶも頭を廻らさずして方めて少(原作小)分の相応有り。僧云く、忽然として火の起る時作麼生。師曰く、能く大地を焼く。

・如何是今時著力処 今の私は主体性をどこに出したら良いか。

・忽然大起時 世界の終りに業火が起る時。

因みに裨樹の火に向つ次いで、師問う、什摩をか作す。裨樹曰く、和合す。師曰く、与摩ならば則ち当頭に脱し去れり。樹云く、隔闕し來たること多少時ぞ。師は便ち袖を払って出づ。

・当頭脱去 その時点でスポンと抜け落ちている。当頭はその場で、その途端に。

・隔闕來多少時也 それと縁が切れてからどれくらい年が経つ。

師、雲岳に問う、千手千眼如何ん。岳云く、無灯の夜に枕子を把著するが如し。云く、汝は還た知るや。師云く、我れは會す、我

れは会す。岳却つて問う、作麼生か会す。師云く、通身是れ眼。神山云く、渾身是れ眼。

・通身是眼 どころも目ばかり。

・渾身是眼 全体が目。

師は有る時衆に示して云く、出世も不出世も尽く是れ出世辺の説。僧曰く、一人有りて肯わず。師云く、真た原作真と饒とい肯わざるも亦た是れ傍出。

・傍出 卷四薬山章 師曰く、大蔵小蔵従何来。吾曰、傍出(二一七頁)。

師、瀧山を辞す。瀧山喚んで云く、智頭陀。師云く、其中の事作麼生。瀧山云く、智頭陀、智頭陀。師云く、也た大いに醜拙。

・也大醜拙 (一応うけがう気持ちが入っているが)もうちょっとすつきり行きたいところですな。

師、新到の参ずるを見、便ち鼓を打つて房丈に帰せり。其の僧又た鼓を打つて僧堂に帰せり。主事の和尚の処に來たりて嘖めて云く、和尚の鼓を打つは本分なり。新到、什摩に因りて無端に鼓を打つや。師曰く、如法に茶餅を批排し、明日我れ汝が為に勸せん。明日に到りて茶餅を批排し、屈して喫せしむる次いで、師は童子に指教して僧を指せり。童子便ち其の僧の身辺に來たりて立つ。其の僧便ち童子の頭を摩して云く、和尚喚べり。師便ち丈室に歸す。主事又た和尚に向つて曰く、比來昨日、無端に鼓を打ち、伊の嘖に堪えんことを要せしに、什摩と為てか却つて他の童子の頭を打ちしや。師曰く、我れは汝が与に勸して嘖め了れり。

・無端 でたらめに、理由もなしに。

・批排 按排順序よく排列する。

・指数 童子に指であいずをして。

・嘖 責のあて字。ほんとうは間違い。

因に高僧の雨を衝いて上堂す。葉山笑つて曰く、汝来たれり。高僧曰く、屢裏。葉山云く、可殺はなはだ湿なつ。高僧云く、与摩の鼓笛を打たず。雲岳云く、皮も也た無し、什摩の鼓をか打たん。師云く、骨も也た無し、什摩の皮をか打たん。葉山曰く、大いに好き曲調。

・汝来也 やあ、いらうしゃい。

・屢裏 鼓笛の出る因縁がここにひそんでいる筈だが、意味不明。

師は大和九年乙亥の歳九月十一日、人有りて問う、伏審す、和尚は四躰違和し、可殺はなはだ瘡通はす、還はた減損せりや。師曰く、者の与摩の地に瘡痛せずして作摩をか作す。所以に古人道わく、願くば今身に償うことを得て、悪道に入りて受けざらんことを、と。

師又た曰く、還た償わず受けざる者を知し道るや。对えて曰く、与摩ならば則ち波は水を離れず、水は波を離れずし去るなり。師便ち薫面に唾す。良久の間にして大衆に問う、如今是れ什摩の時ぞ。对えて云く、未の時。師曰く、与摩ならば則ち鐘を打て。鐘を打つこと三下す。便ち寂を告ぐ。春秋六十七。

・還減損也無 少しは痛みがやわらぎましたか。減損は身体がおとろえる、げつそりやせる意味にもなる。

・者と摩地 今生といつことらしい。

臨行の時、衆に謂いて云く、吾は西逝すると雖も、理として東移する無し、と。後焚きて靈骨一節を得たるに、特異清瑩、其の色は金の如く、其の声は銅の如し。乃ち石霜に塔す。修一大師宝相の塔と勅諡す。

・吾雖西逝、理無東移 達摩をふまえるか。

淨修禪師讚して曰く、長沙の道吾、多く徒を聚めず。世に出でて出でず、樹倒れて藤枯る。寒岳の古檜、碧漢の金鳥。機を垂るること嶮峭、石霜是なるか。

・寒岳古檜、碧漢金鳥 寒岳の古檜とおおぞらの太陽この二句、道吾の家風を少しも伝えていない。

三平和尚、大顛に嗣ぐ、漳州に在り。師諱は義忠、福州福唐県の人なり。姓は楊。

大顛の室に入りてより、深契を獲たり。武宗の澄汰に値いて三平山に隱避す。後、宣宗再び佛日を揚ぐるに値つと雖も、而も彼の海嶼は竟に玄侶を絶つ。後に西院大滄の世に興るに至り、衆中の好事の者十数人、彼に往きて請い、而して方めて玄関を転ぜり。

因みに一僧有り、時に黄大口と称す。師問うて曰く、久しく大口を響う、是れ公なりや。对えて曰く、敢えてせず。師曰く、口は大小ぞ。曰く、通身是れ口なり。師曰く、什摩処に向いて罵するや。当時失対す。是れより法道、声は震海に揚がり、玄徒は瘡癘のを避けず、奔りて遠湊せり。

・響 嚮に同じ。

・通身是口 身体中口だらけ。

師、衆に示して曰く、今時出で来たるは、尽く今の馳求走作を学び、自己の眼目と将当す。什摩の相応する時か有らん。阿佻、学ばんと欲すれば、諸余を要せず。各自に本分の事有り。何ぞ跡取せざる、什摩をか作す。心は憤憤とし、口は排排として什摩の利益か有らん。分明に説かん、若し修行路及び諸聖建立の化門を要めなば、自ら大蔵教有り。若是宗門中の事宜ならば、佻は錯つて用心するを得ず。

人有りて問う、還た学路有りや。師云く、一路有り、滑らかなること苔の如し。僧云く、還た人の躡むを許すや。師云く、心を擬

せずして你自ら看よ。

・将当 ……と見なす。

・各自有本分事 在は句末にあつて強い断定の語気を添える。

・悻悻 争論する。

・滑如苔 苔よりもなめらかだ。

問う、三乘十二分教は学人は疑わず。乞う和尚直に西来意を示さんことを。師云く、大徳、亀毛の扠子、兔角の拄杖、何処に蔵著するや。僧対えて曰く、亀毛兔角は豈に是れ有らんや。師云く、肉重きこと千斤なるに、智は銖両も無し。

荷玉頌して曰く、亀毛の扠、兔角の杖、拈じ将ち来たりて、随処に放く。古人の事、言下に当り、但だ有のみに非ず、無も亦た喪す。

王侍郎問う、黑豆未だ芽を生ぜざる時作麼生。師云く、諸佛も亦た知らず。

師頌して曰く、菩提の慧日は朝朝に照らし、般若の涼風は夜夜に吹く。此処には生せず聚雜樹、満山の明月是れ禅枝。

師云く、諸人若し未だ曾つて知識を見ざれば則ち不可なり。若し曾つて作者に見え来たらば、便ち合躰に妙子の意度を取り、幽岳雅嶠に向いて、孤峯に独宿し、木食草衣す。任摩にし去りて方めて小分の相応有り。若也知解義句を馳求すれば則ち万里に郷原作響。関を望まん。珍重。

師に偈三首有り、即ち此の見聞は見聞に非ず、余の声色の君に呈す可き無し。个中若し了すれば全く無事、躰用に防ぐる無し分つ

と分たざると。

又た曰く、見聞覚知は本より塵に非ず、識海波生じて自ら身を味ます。碧潭の水沫に覆わるるに状似し、靈王は翻つて客中の寶と作る。

・状似 俗語で似るといふ意。

・靈王 心王

又た曰く、見聞覚知は本より因に非ず、当処は虚玄にして妄真を絶つ。見性すれば生せず癡愛の業、洞然として明白たり自家の珍。

師は咸通十三年壬辰の歳十一月六日に遷化せり。春秋九十二。吏部二郎王諷、塔銘を制せり。

石室和尚、長髯に嗣ぐ、潭州攸県に在り。師諱は善道。因みに沙汰の年中に形を改めて行者と為る。沙汰の後、師僧聚集するも更に僧と造らず、毎日碓を踏みて師僧に供養せり。

木口和尚到りて、行者の毎日碓を踏みて僧に供養するを見て問う、行者不易、甚だ消し難し。師曰く、開心坑子裏に盛り將ち来たり、合盤裏に合取す。什摩の消し難き消し易きを説かん。木口失対す。

僧有り雲居に拳似す。雲居云く、得たる底の人の形を改め眼を換う。

・木口 伝灯録十四では杏山とする。

・行者不易、甚難消 あなたは大変ですね。私にはとてもいただけません。不易はねぎらいの言葉。

・開心苾子 不詳。開と合とは反対概念。

・合盤裏合取 ふたつきの皿の中につきばりと取り込む。

・説什摩難消易消 あなたの仰る難消は何んのことか分かりません。

・得底人 石室を指す。

・改形 僧から俗に形を改める。

又た問うて曰く、行者は還た曾つて五台山に到りしや。師曰く、到れり。木口曰く、還た文殊を見しや。師曰く、見たり。進んで曰く、行者に向つて什摩と道いしや。師曰く、闇梨の父母、村草裏に在りと道えり。木口又た失対す。

長慶代つて云く、行者は還た出だし得るや。後、曹山拈じて強上座に問う、是れ賞か是れ罰か。對えて曰く、是れ罰なり。曹山曰く、他の什摩処を罰せるや。對えて曰く、他の有ることを知る処を罰せり。曹山曰く、什摩処か是れ他の有ることを知る処なる。對えて曰く、山中の事を知(原作如)らずして、便ち文殊を認著すと為す。曹山曰く、作麼生か是れ山中の事。對えて曰く、文殊を認めず。曹山曰く、如是、如是。

・向行者道什摩 その時文殊はあなたに向つてどう言つたか。

・還出得摩 草むらから出すことが出来るか。

・是賞是罰 長慶の代語は。

在後、木口出世して数年後に遷化せり。主事は兩人を差して洞山に往かしめ、哀書を達せしむ。僧は書を持して洞山に到り、一切を達し了れり。

洞山、兩人に問う、和尚遷化して後作麼生。對えて曰く、茶毘せり。洞山曰く、茶毘し了つて作麼生。對えて曰く、二万八千粒の舍利を拾得す。一万粒は則ち官家に納め、一万八千粒は則ち三処に塔を起てたり。洞山曰く、還た希異なることを得たるや。對えて曰く、世間に有ることなり。洞山曰く、作麼生か有ることなりと説く。對えて云く、眼有るも曾つて見ず、耳有るも曾つて聞かず、豈に是れ有ることならずや。洞山曰く、任摩に汝が和尚は天下に遍く尽く是れ舍利にし去るよりは、惣に如かず、当時、石室行者の兩

句の語を識取せんには。

・哀書 死亡通知書

滄山、仰山をして石室を探らしむ。仰山は去きて石室に到り、一日を過して後、便ち問う、如何なるか是れ仏。室は拳手す。如何なるか是れ道。又た展手す。畢竟阿那个か即ち是なる。石室便ち擺手して云く、任摩の事勿し。仰山却歸して具さに前話を陳べたり。滄山便ち牀を下りて、石室に向つて合掌せり。

・探 探望、探問、訪問のこと

師、仰山と月に月を翫する次いで、仰山問う、這個の月の尖る時、円相は什摩処にか在る。師曰く、尖る時円相は隠れ、円き時尖相は在り。雲岳云く、尖る時円相は在り、円き時尖相は無し。吾云く、尖る時亦た尖らず、円き時亦た円からず。

自余は未だ実録を覩ず。

徳山和尚、竜潭に嗣ぐ、朗州に在り。師諱は宣鑿、姓は周、劔南西川の人なり。生れてより熏食せず、幼くして敏し。卅歳にして師に従い、年に依りて受具せり。毘尼勝蔵は精研せざるは靡し。解脱相宗、独り其の妙を探る。毎に曰く、一毛の巨海を呑みて海性は虧くる無く、織芥の針鋒に投じて鋒利は動かず。然らば字と非字とは唯だ我れ焉を知るのみ。遂に海内に雲遊し、宗師を訪謁す。凡そ撃揚するに至りては皆な郢哲には非ず。

後、竜潭は則ち石頭の二葉なるを聞き、乃ち衣を撮めて往けり。初見にして独室に少く門徒を駐む。師乃ち看待すること数日、因みに一夜参ずる次いで、竜潭云く、何ぞ帰り去らざる。師対えて曰く、黒し。竜潭便ち燭を点じて師に与う。師の接せんと擬するや竜潭便ち息却せり。師便ち礼拝す。潭云く、什摩の道理を見しや。師云く、今より向去、終に天下の老師の舌頭を疑わじ。

師便ち問う、久しく竜潭を嚮つに、到来するに至るに及んで、潭は又た見ず、竜は又た見ざる時如何ん。潭云く、子は親しく竜潭に到れり。師は不揉（原作糅）の言を聞き、喜びて歎じて曰く、諸の玄弁を窮むること、一毫之を太虚に置くが如く、世の枢機を竭くすこと、一滴巨壑に投ずるが如し、と。遂に乃ち金牙の勇敵を撰し、敬徳の雄征を感し、立雪の玄徒を継ぎ、伝衣の秘旨を俟つ。拾得瓶履、日び精微を扣き、更に他遊せず、豊源に盤泊するもの三十余載なり。

・不揉之言　いじりよのない言葉。

・太虚　おおぞら。

・巨壑　大海。

澄汰の後に于（原作乎）いて、咸通の初年、武陵の太守薛廷迎請して始めて徳山に居らしめたり。是れより四海の玄徒は冬夏常に五百に盈てり。

師は有る時、衆に謂いて曰く、汝等諸方、更に誰か敢えて銘遊せん。有りや。出で来たれ。吾れ汝を識らんと要す。此の語を聞く者、惕慄して鉗結し、敢えて当対する無し。

・銘遊　名遊に同じ。名を付けて形を与える。

・鉗結　舌がむすばれる。

師又た曰く、汝但だ心に無事なれ、事に無心なれ、乃ち虚にして妙なり。若し毫釐も繫念すれば皆な自ら欺ることを為す。弊尔として情を生ずれば万劫に鎖に羈がれ去らん。

師問うて曰く、維那、今日幾个か新到せる。対えて曰く、八个有り。師曰く、一時に来たらしめよ、生案過却せん。

僧、禾山に問う、一時に来たらしめよ、生案過却せん、此の意如何ん。禾山云く、纔かに門を出づるや、便ち下客なることを知委す。僧曰く、如何にしてか此の過を免れ得ん。禾山曰く、万里来たること無くして却って伊を肯つ。

欽山、天皇に問う、也た与摩ならば、未審し徳山は作麼生か道わん。師曰く、試みに天皇竜潭に拳し看よ。欽山礼拝す。師乃ち之を打つ。雲大師代つて曰く、与摩ならば則ち自ら虚言已に失せることを置す。

・生案 不詳

・過却 かたづけまして。

・下客 不詳

師又たの時に云く、問えば則ち過有り、問わざれば則ち乖く。僧便ち礼拝す。師乃ち之を打つ。僧云く、某甲始めて礼するに什摩と為てか却つて打つ。師云く、汝の口を開くを待ちて什摩をか作すに堪えん。

師がある時言つた、問えばとが有り、問わなければそむく。すかさず僧が礼拝した。そこで師はこれを打つた。僧が言つ、私はお辞儀をしたばかりなのに、なぜ打つのですか。師が言つ、お前が口を開く段になって、何の役に立つといつか。

師、僧の来たるを見て便ち門を閉却す。僧便ち門を敲く。師問う、阿誰ぞ。僧云く、師子兒なり。師は便ち門を開く。其の僧便ち礼拝す。師は頭に騎却して云く、者の畜生、什摩処に去き来たれる。

師因みに病む次いで、問う、和尚は病めり。還た病まざる者有りや。云く、有り。進んで曰く、如何なるか是れ病まざる者。師云く、阿耶、阿耶。

・阿耶 苦痛の叫び声。

龍牙問う、学人の鑢郷の鋏に仗りて、師の頭を取らんと擬する時如何ん。云く、侂作麼生か手を下さん。龍牙曰く、与摩ならば則ち師の頭は落ちたり。師は答えず。

龍牙後に洞山に到り、具さに上事を陳べたり。洞山云く、徳山の落つる底の頭を把り將ち来たれるや。龍牙無對。

問う、如何なるか是れ菩提。師便ち咄して云く、出で去れ、這裏に向いて痾すること莫れ。

岳頭問う、凡聖は相去ること多少ぞ。師は喝一声す。

・多少 どれほど

・喝 大声でどなること。カーツと言つのではない

因みに南泉の第一座、猫児を養いしが、隣床の脚を損し、此れに因つて相諍う。人有つて和尚に報す。和尚便ち下り来たつて、猫児を拈起して云く、人の道い得る有りや、人の道い得る有りや。若し人の道い得る有らば、這個の猫児の命を救わん。對え無し。南泉便ち刀を以て斬りて兩櫛と作す。

雪峯、師に問う、古人の猫児を斬る、意作麼生。師便ち趁いて雪峯を打つ。雪峯便ち走る。師却つて喚びて来たらしめて云く、会するや。對えて云く、会せず。師云く、我れ与摩に老婆なるに、侂は会せず。師、岳頭に問う、還た会するや。對えて云く、会せず。云く、会せざるを成持取せば好し。進んで曰く、会せざるに个の什摩をか成持せん。師云く、侂は櫛鉄に似たり。

・斬作兩櫛 ふた切れにした

・成持取 守り立てて行く。取は接尾語

・入矢義高「南泉斬猫私解」、『空花集』所収（参照）。

雪峯、徳山に在りし時、法堂に上り、和尚を見て便ち転ず。師曰く、此の子は偕すること難し。

長慶拈じて問う、什摩処か是れ雪峯の徳山と相見せし処なる。僧は対え無し。慶代つて云く、還た当るを得るや。更に樞要有り、備さに広誨に陳ぶ。

咸通六年乙酉の歳十二月三日、忽ち諸徒に告ぐらく、空を捫で響（原作響）を追いて、汝が神を勞するや。夢と覺と、覺と非覺と何事か有らん、と。言い訖つて宴坐安詳し、奄然として化に順えり。

春秋八十四、僧夏六十五。見性大師と勅諡す。沙門元会、碑文を撰せり。

浄修禅師讚して曰く、徳山朗州、剛骨は儒無し。尚お祖仏すら祛る、豈に證修を立てんや。釈天の杲日、苦海の慈舟。誰か眞躅を攀ずる、雪峯巖頭あり。

祖堂集卷第五